

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録（2014.12）平成25年度:95.

皮膚穿孔した腫瘍を持つ終末期患者が自己で創処置を行うまでの心理変化と看護介入

末武 美穂, 井戸川 みどり

皮膚穿孔した腫瘍を持つ終末期患者が自己で創処置を行うまでの心理変化と看護介入

旭川医科大学病院 末武 美穂、井戸川みどり

【目的】

皮膚穿孔した腫瘍のある終末期患者が自宅退院するために、自己で創処置ができるようになるまでの心理変化と看護介入について明らかにする。

【方法】

A 病院にて自己で創処置を行う必要があった 70 歳代女性の終末期患者 1 名の事例研究である。方法は看護記録より患者の創処置への思いが記載されている部分を抽出し、看護介入と併せて分析をした。倫理的配慮は研究目的、協力の任意性、プライバシーの保護などについて遺族に説明し承諾を得た。また、A 病院の倫理委員会の承諾を得た。

【結果】

入院直後は創部から出血していたため患者からは「傷を見るのが怖い」という言葉が聞かれた。患者は創処置に参加できず、看護師はその思いを傾聴した。創部からの出血が減少し、状態が落ち着くと共に患者は創処置に少しずつ参加するようになった。患者からは「試にやってみよう」「ちょっとずつやっっていかなきゃ」という言葉が聞かれた。看護師は創処置の方法や物品を患者と

一緒に検討し、患者ができていることを肯定的に伝えた。創処置を自己で行えた時は看護師は継続できるように支援した。患者からは「(腫瘍を)見たら吹っ切れた」「やっっていかなきゃならない」という言葉が聞かれ、外泊時には自己で創処置ができた。自宅退院に向け、家族・他職種・訪問看護ステーションと合同カンファレンスを行い退院後の支援体制を整え、自宅退院となった。

【考察】

看護師は患者の望んでいる自宅退院という目標を患者と共有したこと、また、創処置に関して患者の思いを受け止め、患者ができる処置方法や物品と一緒に検討し、できている部分を認めたことは、患者が自己で創処置を行うことの自信や自宅退院への意欲を支えたと考える。患者は外泊時に自己で処置ができたことは成功体験となり創処置や退院への自信が増し、さらに、入院中に退院後の支援体制を整えたことで、家族を含めた退院後の生活への不安の軽減に繋がったと考える。